― 蝶の羽ばたき ―

2022年最初のえん通信をお届けします。

年末には収束が近いかと思わせた新型コロナウイルスは、オミクロン株の登場で一転感染爆発、えんでも職員家族の感染や利用者さんの濃厚接触認定など、緊張が走る年明けになりました。えんは週一回のPCR検査が頼みの綱で、メールでの検査結果報告「全員陰性」に毎回胸をなでおろしています（1月28日現在）。社会全体でもっと気軽に検査が受けられれば、もう少し安心できるはずですが、今度は軽症が多い若年層は検査なしで自宅療養とか、コロナ禍から2年、検査体制さえ拡充できないのかとため息がでます。

年明け早々、励まされ心温まるお便りを続けていただきました。一つ目は知らない方からの宅急便、長野県飯田市にある社会福祉法人ゆいの里からです。開封すると手紙と当地のパンフレット、それにおいしそうなリンゴまで入っていました。手紙にはグループホームえんの「百年インタビュー」を掲載した雑誌を読まれ（えん通信に掲載したもの加筆し介護専門誌『ゆたかかなくらし』に寄稿）、ご当人の出身地が法人のすぐ近くであり、嬉しくてお手紙をくださったとのこと。文章にまとめたスタッフはじめ、みんなが思いがけないプレゼントに大喜びしました。

もう一つは、利用者さんからのご寄付に添えられていた「これからもバタフライ・エフェクトを」の一言。バタフライ効果とは「ブラジルの1匹の蝶の羽ばたきはテキサスで竜巻を引き起こすか？」という素敵な問いに由来します。気象学者ローレンツの講演表題だといいますが、小さな働きかけが大きな変化をもたらす可能性があるたとえにも使われます。えんがことあるごとに要望書を出すなどの活動をしているのを励ましてくださったのですね。このお手紙をいただいた前日、毎日新聞の論壇『発言』欄に小島の寄稿が掲載されました。タイトルは『訪問ヘルパー、消滅の危機』。内容は再三ここでも取り上げている人材難と国の対応不足ですが、「何度言っても変わらない…」とネガティブな気持になっていたところでした。いやいや、小さなNPOのアクションが変化をもたらすかもしれないと教えられました。『発言』はえんホームページにアップしていますので、ご覧いただければ幸いです。

皆さんの励ましで、今年も「発信するえん」でありたいと願っています。

代表理事　小島美里